

殉教伝と夢

― 天上の報いと執り成し ―

津田 謙治

1. 「問題設定」

最初期のキリスト教における夢の位置付けは、新約文書や外典文書などを確認する限り、基本的には積極的な評価を伴うかたちで受け入れられていたように見える。マタイ福音書は救済者到来に関わる出来事を夢による天使の告知と結び付けており（1：20-）、使徒行伝の中ではペンテコステにおける聖霊降臨の出来事についてペトロが旧約聖書のヨエル書を引用しつつ夢を見ることを擁護し（2：17-）、またパウロが見た「夢¹」がマケドニアへの宣教の方向性と関連付けられて記録されているからである（16：9-）。しかしながら、創世記におけるヤコブやヨセフの夢の物語と比較するならば、夢の重要性が新約文書において増しているとは捉えにくく、先の夢に関する記述も共観福音書間ではマタイにしか見られず、またマタイと使徒行伝の該当箇所も極めて簡潔な文章に留まっていることは指摘すべき点である。

2 世紀から 3 世紀にかけての状況を見るならば、東方ではアレクサンドリアのクレメンスが節制と欲望の観点から夢に対して否定的な見解を展開するのに対し²、オリゲネスは回心と夢を結び付けつつ夢について肯定的な立場を取っていた³。他方、西方ではテルトゥリアヌスが、夢の類型論を通じて、夢を楽観的に捉えることに対して慎重な議論を展開していた。これらの状況については、既に別の場で確認をおこなった⁴。

本研究では、上記の時代の複数の殉教伝を取り上げ、これらの中で夢がどのような位置付けをもつかを分析する。これらについての研究史を踏まえるならば、これから見ていく『ペルペトゥアとフェリキタスの殉教』については多くの先行研究があるが、その多くは夢のモチーフ（蛇、老人、ミルク、羊飼、エジプト人など）の解釈に重点が置かれており⁵、また他の殉教伝との比較も積極的にはおこなわれていない⁶。そこで本研究では、夢に現れるモチーフも確認しつつ、教理や神学的議論の形成という視点から、モチーフ以外の読み取るべき要素を分析し、またこの殉教伝に影響を受けたとされる『マリアヌスとヤコブスの殉教』など他の殉教伝と比較をおこないつつ、殉教伝に見られる夢の位置付けを

考察する。結論を先取りするならば、多くの場合において、夢は夜に示された幻として叙述され、未来の予示だけでなく天上での出来事など、各殉教伝の編集者によって神学的議論が語られる舞台装置のようなものとして機能していること、また編集者から見て天に引き上げられたことが確実視されている殉教者自身が夢を見て、それを語ることによって、偽りの夢と見なされる危険を回避できていることが指摘される。以下、先に述べた『ペルペトゥアとフェリキタスの殉教』と『マリヤヌスとヤコブスの殉教』、これらとの影響関係を指摘される『モンタヌスとルキウスの殉教』の三つのアフリカ西方のテキストに加えて、カイサリアのエウセビオスが報告する『ポタミアイナとバシレイデスの殉教』という地中海東方を舞台とするテキストを分析することによって、殉教伝における夢の位置付けについて考察を試みたい。

2. 『ペルペトゥアとフェリキタスの殉教⁷』に見られる夢

203年にセプティミウス・セウェルス帝（位193-211年）治下の迫害によってアフリカのカルタゴで殉教したとされるペルペトゥアとフェリキタスの殉教伝は、殉教者が見た四つの幻⁸を主軸として物語が構成されている。主題となっている二人は若年の洗礼志願者であったが、その信仰ゆえに捕縛され、牢獄に入れられており、のちに彼女たちは闘技場で獣によって処刑されることが宣告される。ペルペトゥアは乳飲み子を産んだばかりの名門の女性で、フェリキタスは奴隷として描写されている。本書で語られる四つの幻のうち、最初の三つはペルペトゥアが見たもので、最後の四つ目は、彼女の洗礼準備を担当したサトゥルスが見たものである。尚、のちに本論でも確認するように、この殉教伝の冒頭では、この著作の編集者が新しい預言や幻を重視し、殉教者が見た夢や幻を通じて読む者の信仰を強める可能性について触れている。以下、本著作に見られる夢ないしは幻の内容を順に確認してみたい。

まず、一つ目の幻は、牢獄の中でペルペトゥアが弟の勧めに従って幻を神に求め、その結果示されたものとして描かれている。それは、自らの意志で天に昇る表象と結び付けられている。

（ペルペトゥア・第1の幻）「そのとき、私〔ペルペトゥア〕の弟が私に言った。

『愛する姉よ、今あなたは大きな栄誉の中にいます。それは、あなたが幻を〔uisionem〕求めれば、受難するか解放されるかが示される〔ostendatur〕ほどもです』。……『明日、私〔ペルペトゥア〕はあなたに報告するでしょう』。私は願ひ求め、私に次のことが示された〔ostensum〕。私は、驚くべき大きさをもった青銅の梯子〔scalam aeream〕が天にまで伸びているのを見た……梯子の側面には、あらゆる種類の鉄の武器がはめ込まれていた。……その梯子の下には、驚くべき大きさをもった龍〔draco〕が横たわっており、登ろうとする者たちを待ち伏せて、彼らが登らないように怯え上がらせていた。先にサトゥルスが登った。……そして、あたかも最初の段を踏むように、私はその〔龍の〕頭を踏んで、登った。そして、庭園の巨大な空間があり、その中央で羊飼いの服装で、大柄で、白髪の人物が座り、羊の乳を搾っているのを私は見た。……彼は私を大声で呼び、あたかも小さなパンのような、乳で搾ってできたチーズを私に与えた。私は両手をくっつけてそれを受け取り、食べた。そして、周りに立っている者たち一同が『アーメン』と言った。この声の音で私は目が覚めた〔experrecta sum〕……」（『ペルペトゥアとフェリキタスの殉教』4,1-10）

ここで語られている幻の内容は、天にまで達する梯子が見え、まず彼女の洗礼準備担当者であるサトゥルスという人物が梯子を登り切ったのち、彼女自身もそれを登り、その後、開けた庭園に出たところで老人に出会うというものであった。このような梯子は、創世記におけるヤコブが見た夢〔28：12-〕を彷彿とさせるが、ヤコブが見たような、御使いが梯子を昇降する様子や、枕元での神の臨在については描かれていない。むしろ、彼女が見たのは鉄の武器が取り付けられた物騒な梯子と、その下にうずくまっている大きな龍であった。龍を踏みつけて梯子を登るペルペトゥアの夢は、迫害や地上的な勢力を乗り越えて天に登る議論と重なっている。そして、梯子を登り切った先の天で出会う羊飼いのような老人は、味わい深い食物を与える様子から、彼女が神的な恵みに与えることに関連付けられていると推察される。ここでは、殉教がもつ神学的意味が、彼女の夢を通じて語られていることが明確に確認できるであろう。尚、冒頭の、弟に勧められて夢や幻を意図的に神に求める箇所は、他の殉教伝なども含めて極めて珍しく、ある種のインキュベーション的な夢の見方との関連性が指摘できるであろう⁹。

次に、二つ目の幻は、祈りの最中に彼女が異言を発したその夜に示されたものである。それは、先ほどの弟とは別の、7歳で病死した弟が暑さに渴いて苦しんでいるにもかかわらず、水場が高くて届かずに飲めず、それを見た彼女が夢の中で悲しむというものであった。

（ペルペトゥア・第2の幻）「ただちに同じ夜に〔nocte〕、私〔ペルペトゥア〕に次のことが示された〔ostensum〕。私は、〔幼い頃に亡くなった〕ディノクラテスが暗い場所から抜け出るのを見た……。〔彼は〕とても熱があつて、喉が渴いていた……。そのため、この〔弟の〕ために私は祈りを〔orationem〕おこなっていた。私と彼との間には大きな間隙があり、どちらかが相手に近づくことはできなかった。それから、ディノクラテスがいたその場所には、水でみなぎった水槽があり、その端は少年の背丈よりも高かった。……。私は嘆き悲しんだ。というのも、水槽には水があるのに、端の高さのために飲めないからである。そして、私は目が覚め〔experrecta sum〕、私の弟が苦しんでいるのを知った」（『ペルペトゥアとフェリキタスの殉教』7,3-9）

この夢の中では、自分の弟は喉の渇きに苦しんだままであるが、目が覚めた後で、彼女自身はそれに対して救いの手を差し伸べることができると確信したことまでが描かれている（7,9）。ここでは、殉教者となる自らの祈りによる救済への執り成しが、生者だけでなく既に死んでいる者にも及ぶ可能性が描かれていることが垣間見られる。尚、この第二の幻の続きが別の日に示され、そこでは祈りを通じて弟のディノクラテスの身体が浄められ、また水の入った水槽が飲める高さまで下がっており、弟が無事に水を飲んだ様子が描かれている。

さらに、三つ目の幻は、彼女が円形競技場で獣と戦わされて処刑される前日に示されたものである。この夢では、彼女自身が突然男性の姿に変貌し、闘技場の敵対者として現れたエジプト人を打ち負かした後、勝利と栄誉の証を入手していた。

（ペルペトゥア・第3の幻）「私たちが（闘技場で）戦うことになる前日、私は幻の中で（in horomate）次のことを見た。助祭〔diaconum〕のポンポニウスが牢獄

の戸口まで来て、〔その戸を〕激しく叩いた。私は彼のところまで出て行き、それを開けた。彼は私に言った。『ペルペトゥア、私たちはあなたを待ち望んでいます。来なさい』。……〔ボンポニウスは〕私を闘技場の中央に導き、私に言った。『怖がってはいけない。ここで私はあなたと共にいて、あなたと共に苦しみます』。そして彼は立ち去った。……そして、私の敵対者として忌まわしい姿のエジプト人が、彼の助力者たちと共に、私と戦うために出て来た。私のところにも、美しい、私の助力者かつ支持者たちが進み出た。私は〔衣服を〕奪われると、男になった。……私たちは互いに近づき、拳を放ち始めた。……そして〔エジプト人〕は顔から倒れ、私は彼の頭を踏みつけた。民衆は大声で叫びはじめ、私の支持者たちが詩篇を歌いはじめた。私は剣闘士訓練者に近づき、〔勝利の〕枝を受け取った。彼は私に接吻し、『娘よ、平安があなたと共に〔あるように〕』と言った。そして、私は栄光と共に生者の門まで進んだ。そして、私は目が覚めた〔et expectat sum〕』（『ペルペトゥアとフェリキタスの殉教』 10,1-13）

上述の夢の中で突如現れる剣闘士訓練者は闘技場をも上回るほどの巨大な姿として描かれ、厳粛なかたちでその場を仕切り、最後にペルペトゥアに栄誉を与えている。彼女は、夢から目が覚めた後、これから闘技場で戦う相手を獣ではなく「悪魔」（diabolum）と同一視しており（10,14）、夢で見たエジプト人への勝利は、大柄な神的存在の表象と共に、彼女が既に見た第一の幻と類似していると言える。

最後に、四つ目の幻は、ペルペトゥアではなく、彼女の一つ目の幻で出て来た洗礼準備担当者のサトゥルスが見たものとして提示されている。この夢の中では、既にサトゥルスもペルペトゥアも殉教しており、肉体から離れた彼らが、四人の天使たちによって運ばれた先で、別のより高位の天使たちや、白髪の老人、また既に殉教を遂げた者たちと邂逅し、喜びに満たされることが語られている。

（サトゥルス・第4の幻・前半）「さて、祝福されたサトゥルスも、自分が書き留めた、次のような自分の幻を〔visionem suam〕公にした。彼は言った。『私たち〔サトゥルスとペルペトゥア〕は殉教し、肉体から抜け出て〔exiimus de carne〕、四人の天使たちによって東の方へと運ばれ始めた。天使たちの手は私たちに触れて

いなかった。……最初の世界から解放されると、我々は測り知れない大きさの光を見た。彼〔サトゥルス〕はペルペトゥアに（というのも彼女は私の横にいたのであるから）言った。「これは、主が私たちに約束していたものである。私たちは約束されていたものを受け取った」。私たちが四人の天使たちによって運ばれている間に、私たちのところに大きな空間が現れた。それは、あたかも庭園のようであって、バラの木やあらゆる種類の花々があった。……その庭園には、さらに他の四人の天使たちがいて、他の者よりも明るく輝いていた。……私たちは自分の脚で広い道を通して広場まで移動した。そこで、私たちは、同じ迫害で生きたまま焼かれたヨクンドゥス、サトゥルニヌス、アルタクシウスに出会った。……他の天使たちが私たちに言った。「まず来て、中に入って、主に〔Dominum〕挨拶をしろ」。私たちは、あたかも光で建築されたかのような壁の場所に来た。……同じ場所に、白髪の、あたかも人間のような方が座っているのを私たちは見た。雪のように白い髪をもち、若々しい顔立ちで、その脚を我々は見なかった。この方の右側と左側に四人の老人たちがおり、彼らの後ろには他に多くの老人たちが立っていた。私たちは感嘆とともに中に入り、玉座の前に立った。そして四人の天使たちが私たちを持ち上げ、私たちはその方に接吻した。……彼女〔ペルペトゥア〕は私に言った。「肉において幸せであったときよりも、今ここでより幸せであることに、私は神に感謝を述べます」。』（『ペルペトゥアとフェリキタスの殉教』 11,1-12,7）

殉教を遂げた二人は、肉体を解放された状態で東方の庭園のような場所に運ばれている。そこには玉座に座る神的存在とそれを取り囲む老人たちがおり、またそこは至福に包まれていたが、天の門を隔てて地上の世界と接続していた。

（サトゥルス・第4の幻・後半）「私たちが外に出ると、門の前に司教のオプタトゥスが〔Optatum episcopum〕右側に、司祭で教師であったアスパシウスが〔Aspasium presbyterum doctorem〕左側に、別々に悲しんでいるのを見た。彼らは我々の足下に身を置いて言った。「我々を調停してください〔Componite inter nos〕。というのも、あなた方は出て行って、私たちをあとに残したのだから」。……私たちが彼らと話していると、天使たちが彼らに言った。「彼らをそっ

としておきなさい。あなた方の間で意見の相違があるなら、あなた方相互で断念しなさい」。〔天使たちは〕彼らを狼狽させた。そして、オプタトゥスに言った。「あなたの信徒を戒めなさい。というのも、彼らはあたかも円形闘技場から戻って、一団で争っているかのように、あなたのもとに集まっているのだから」。そして、〔天使たちは〕門を閉ざそうとしているように我々には見えた。私たちは多くの兄弟がそこにおり、殉教者たち〔martyras〕もいることに気付きはじめた。私たちはみな、言い表せない香りによって強められ、それは我々を満足させた。それから、喜びを感じながら、私は目が覚めた〔experrectus sum〕。』（『ペルペトゥアとフェリキタスの殉教』 13,1-8）

この幻の後半で登場する司教オプタトゥスと司祭アスパシウスは、未だ地上で活躍している高位の聖職者たちとされている。彼らは、殉教者として天に引き上げられたサトゥルスたちに執り成しや調停を懇願しており、そのような依頼に困惑した殉教者たちの傍で、天使たちが存命中の聖職者たちに勧告をおこなっている様子が示されている。これらの描写からは、聖職者が地上の混乱を治める役割が確認されるとともに、殉教者がそれを越えた権威を有すると考えられていたことが窺える。

さて、ここまで確認した殉教伝は、ペルペトゥアとサトゥルスが実際に見たとされる幻の記述と、最終編集者による加筆等から構成されている。もちろん、編集者が幻の内容を偏向的に改変した可能性も指摘されうるが、幻の内容の大まかな枠組みについては、実際に見られたものが基底となっていると考えられる。この編集者の立場は、この殉教伝の冒頭（第1章）で明らかにされている。

（ペルペトゥアとフェリキタス・編集者）「というのも、主はこう言われるからである。『最後の日には、私の霊〔Spiritu meo〕をすべての肉なるものに注ぎ、彼らの娘たちや息子たちは預言するであろう〔prophetabunt〕。私の奴隷や女奴隷の上にも私の霊を注ぐであろう。若者たちは幻を見〔uisiones uidebunt〕、老人たちは夢を夢見るであろう〔somnia somniabunt〕』（『ヨエル書』 2：28¹⁰）。したがって、我々は、約束されたものとして、同様に新しい預言と新しい幻を〔prophetias ita et uisiones nouas〕認め、敬意を表するのであり、聖霊のその他の力が教会のもの

にまで及んでいると考えるのである（同じ聖霊が送られたのは、あらゆる賜物〔omnia donatiua〕がすべての人々において働くためであり、それは主が一人一人に分け与えたのと同様である）。……」（『ペルペトゥアとフェリキタスの殉教』1,4-5）

ここでは、聖霊の働きと、新しい預言と幻の価値を重んじていることが確認できる。この点において、この書は極めてモンタヌス主義的であり、そこからカルタゴのテルトゥリアヌス（160頃-225頃）を最終編集者と見なす傾向も一時期あったようである。伝統的な見解として、テルトゥリアヌスはカトリック教会を離脱し、モンタヌス主義に転向したと見なされている。しかし、文体等の相違から、恐らく彼本人ではなく、テルトゥリアヌス周辺の聖職者によるものと考えられるであろう¹¹。この編集者が、ペルペトゥアたちが見た幻にどの程度加筆したかは分からないが、これまで確認してきた神学的議論と、ヨエル書などを引用しつつ夢を重視するあり方は、編集者の属する共同体の見解と多くの点で一致していたことが想像される。

尚、この殉教伝だけでなく、他の殉教伝にも共通する傾向として、夢と幻を同一視する一方、明確に夢を見た、という表現は取られず、例えば上述のヨエル書の引用で見られる「夢（somnia）」という単語は殉教者の幻の箇所では用いられていない。また幻についても、「幻（visio）」だけでなく、この時代では恐らく珍しい「幻（horoma）」も用いられている。これらは多くの場合、夜に見たことや、眠りと関連付けられていることから、夢と等しいものと見なすことについては問題ないであろう。尚、幻が「示された（ostensum）」と、「私は目が覚めた（experrecta sum）」という表現は、多くの箇所で共通している。

3. 『マリアヌスとヤコブスの殉教』に見られる夢

恐らくペルペトゥアに関する殉教の物語に影響を受けて¹²、同じアフリカのヌミディアでの迫害を主題とした『マリアヌスとヤコブスの殉教』は、カルタゴ司教キュプリアヌスの殉教（258年）と近い時期を背景としている。また、これから見ていくように、殉教者が見た夢の中にキュプリアヌスも登場する。この殉教伝では、主題となるマリアヌスとヤ

コブスに加えて、アエミリアヌスという 3 人の人物の夢の議論が展開されている。尚、『ペルペトゥアとフェリキタスの殉教』と同様、ここでも殉教伝の編集者もしくは著者が冒頭で殉教と信仰の証に関する意義を説いており、これから見ていくように、登場する殉教者たちと編集者が共に行動をとっていたことが語られているのが特徴的である。ただし、こちらの冒頭ではモンタヌス主義的な文脈で幻や夢を強調するような言説は特に見られないが、殉教伝全体においてそれらが重視されている点は内容から十分に窺える。以下、三人の殉教者たちが見た幻を分析する。

最初に描かれている、教会の聖書朗読者であったマリアヌスの見た幻は、彼が拷問を受けて肉体に激しい痛みを受けた後に、深い眠りに落ちて示されたものである。その夢の舞台は裁判所であり、罪人として連行された彼が裁判官の前に立つと、既に殉教していたキュプリアヌスが裁判官の右側に突然現れ、彼の勧めに従って、自分はもはや罪人としてではなく他の裁判に陪席する者となった。

(マリアヌス・幻)「実際、マリアヌスは、かの身体的な拷問のあと、より深く平穏な眠り〔*altius in soporis tranquilla*〕についた。目を覚ました彼は〔*expergefactus*〕、神の栄誉が救済の希望を確実にするために示された〔*ostenderit*〕ことを我々に語った。次のことが示された〔*Ostensum est*〕。…………それは、高く真っ白な裁判所の格調高い破風で、そこでは、長官の代わりに極めて美しい姿の裁判官が座っていた。…………〔キリスト教徒であることを〕告白した者たちの集団が引き入れられ、彼らをあの裁判官が剣のところまで引いていくように命じていた。私の順番が来た。…………あの処刑台に私は登っていた。すると見よ、私には全く予測できなかったことに、キュプリアヌスが現れ、あの裁判官の右側に座っていた。彼は、手を伸ばして、私を処刑台の最も高いところに持ち上げ、微笑みかけて言った。『来て、私と共に座りなさい』。…………かの裁判官が立ち上がり、我々はその屋敷まで彼に同行した。…………さて、その中央には窪地があり、それは透き通った泉で満たされ、混じり気のない水が溢れ出していた。すると見よ、突然、私たちの目からあの裁判官が消えた。それから、そこでキュプリアヌスが泉の端にあった大きな鉢を掴んで、喉が渴いているような素振りで、それを泉〔の水〕で満たし、それを飲み干した。そして、再び満たすと、私に差し出し、私

は進み出て飲んだ。私が神に感謝を述べると、私は自分の声で目が覚め
〔excitatus〕、起き上がったと彼〔マリアヌス〕は言った」(『マリアヌスとヤコブ
スの殉教』 6,5-15)

ここでは、審判ののちに天で神的な報償を得るという構図や、威厳ある裁判官、天にあるとされる庭園と、そこにある水、その水によって渇きが満たされる様子など、幾つかの点でペルペトゥアなどの殉教伝と一致する箇所が見出される。しかし、ペルペトゥアの殉教伝で重視される迫害を耐え忍ぶ箇所は夢の中には無く、また天のような場所で出会うのは白髪の老人ではなく、裁判官と殉教者キュプリアヌスであった。ただし、神的とも言える裁判官は、当初、剣による処刑を命じているが、天に導く存在へと変貌している。

次に、二つ目の幻はヤコブスの見たものである。ヤコブスは助祭であり、先ほどのマリアヌスと同様、下位の聖職者であったと殉教伝は報告している。彼らと、この殉教伝の編集者は馬車に乗って旅をしていたが、その途中で、ヤコブスが真昼頃に突然奇妙な深い眠りに襲われ、その時に示されたものとして夢が語られている。

(ヤコブス・一つ目の幻)「すなわち数日前に、ガリア風の同じ荷馬車で、マリアヌスやヤコブスと共に、私が〔ego〕一緒に道を急いでいたとき、ほとんど真昼頃に、でこぼこの進路の中で、〔ヤコブスは〕不思議な深い眠り〔mirabili et alto sopore〕に襲われた。私たちによって〔眠りを〕妨げられて起こされた〔excitatus〕彼は、目を覚ました〔euigilat〕のち、次のように言った。『兄弟たちよ、私は混乱したが、喜びがないわけではない。だが、あなたたちも、私と共に喜ぶべきである』。彼は言った。『私が見たのは、言い表せないほど極めて大きな若者であった。……その脚は大地を踏んでおらず、正面の顔は雲を越えていた。彼は、走ってきて、一つはあなた、つまりマリアヌスに、そしてもう一つは私〔ヤコブス〕にと、赤紫色の帯を私たちの胸に投げ、そして「すぐに私のあとについて来なさい」と言った』。おお、この眠りは〔quietem〕、あらゆる不寝番よりも、何と不屈なものであるだろうか。信仰をもって不寝番をする者は、何と幸福なかたちで眠る〔dormiat〕のであろうか。というのも、〔このような眠りは〕この世の肢体だけを眠らせるが〔sopierat〕、霊〔spiritus〕が働くのでなければ、主を見ること

〔uidere dominum〕はできないからである。殉教者の魂が〔animos martyrum〕いかに喜び躍り、気高くあったかが信じられるべきである。彼らは、聖なる名において告白することによって受難することになるが、前もって、自らをいかなる場所においても、時間においても現すキリスト〔の言葉〕を聞き、見るのが可能となるのである。……主は、新たなあり方の恵みによって、自らの殉教者に対して幻の〔uisionis〕新たな時を選んだのである」（『マリアヌスとヤコブスの殉教』7,2-7）

その内容は、顔が雲の上に出るほど巨大な若者が現れ、この若者が二つの赤紫色の帯を自分たちに向かって投げてよこし、この若者に従って付いてくるように命じられるというものであった。ここでは、他の殉教者の夢にも現れる巨大な審判者のような存在を確認できるとともに、この存在が投げてよこす帯を通じて、殉教の報いの獲得を暗示していると解釈することが可能である。さらに、ここでは夢の描写の後に続くこの殉教伝の著者の見解も特徴的である。この人物は、夢を見ていたヤコブスの傍におり、その夢の働きを分析した上で、神の啓示があらわされる場合、眠りは身体のみを訪れ、霊や魂は主を仰ぎ観るものと見なしている。このような考え方は、テルトゥリアヌスが眠りについて分析した箇所にも類似したものが見出される。テルトゥリアヌスも同様に、眠りが活動している諸感覚を無力化させ、魂ではなく身体だけに休息をもたらすものと指摘している¹³。他方で、ペルペトゥアの洗礼準備担当者サトゥルスが見た幻では、身体の束縛を離れた殉教者たちの描写において、魂に関する記述そのものが欠落していたことは指摘すべき点である。ペルペトゥアの殉教伝に類似した議論を展開しつつも、ここでは人間論的な事柄については別の観点が論じられている。また、このヤコ布斯と共に行動した編集者は、啓示としての夢を神の恵みとして理解している点は『ペルペトゥアとフェリキタスの殉教』と類似した価値観を共有しつつも、キリストが夢や幻を見させるのに、夜などの特別な時間や場所を必要としないと説いていることから、インキュベーション的な考え方を前提としていないことも窺える。

尚、ヤコ布斯については、次に見るアエミリアヌスの幻（8,1-11）が語られた後で、殉教の前日に牢獄の中で眠っている間に（in carcere per tempus quietis）別の幻を見たことが記述されている（11,3-6）。それによると、既に殉教を遂げたアガピウスという人物と、やはり三日前に母親と一緒に殉教した双子の少年の一方がヤコブスの夢に現れたとき

れる。ヤコブスは自分が見た夢を次のように語っている。

(ヤコブス・二つ目の幻)「ヤコブスは言った。『いいでしょう。私はアガピウスや、他の最も至福に満ちた殉教者たちとの饗宴〔conuiuium〕へと向かう。というのも、兄弟たちよ、昨夜〔ista nocte〕私は、幸福に満ちた我々のアガピウスが、我々と一緒にキルタ¹⁴の牢獄に閉じ込められた他のすべての者たちの間で、莊重かつ至福に満ちて饗宴を祝うのを見た〔uidebam〕のだから。私とマリアヌスが、あたかも愛餐に向かうように〔quasi ad agapem〕、愛情と慈愛の霊によって駆り立てられると、我々に向かって少年が走ってきた。この少年は、双子の一方で、三日前に母親と共に苦難に遭ったことは周知の事柄であり、バラの花輪を首にかけて、右手に若々しいシュロの枝〔勝利の栄冠〕をもっていた。この少年は次のように言った。『あなたがたはなぜ急いでいるのか。喜び踊りなさい、なぜなら明日、我々と共にあなた方も食事にあずかるのだから』。……」(11,3-6)

ここでは、前日に見た夢の内容として、既に殉教した者たちが至福に満ちて饗宴に参加しており、その食事にヤコブスたちも明日あずかること、そしてそれは明日殉教を遂げることを意味するとともに、それは恐らくこの世の迫害に対する勝利として説明されていることが見出される。このような夢が意味しているものは、他の殉教伝とともに、殉教の積極的位置付けだけでなく、死ののちに起きうる事柄が予示されていると言える。

さて、殉教伝の記述の順序を少し遡るが、三つ目の幻は、騎士階級のキリスト教徒アエミリアヌスが見たものであり、彼が真昼に牢獄の中で眠った際に示されたものとして語られている。それは、異教徒でもある自分の実の兄弟が、牢獄の中にいる自分に神学的な議論を投げ掛け、それに対して彼が応答するものが主たる内容となっている。

(アエミリアヌス・幻)「アエミリアヌスは……牢獄の中で継続して断食の延長を続け、頻繁に繰り返し祈り、それによって神に奉じた精神〔mens〕は養われ、翌日の主のサクラメントに〔sacramento domini〕備えていた。真昼に眠りに〔in somno〕落ちたが、やがて穏やかにこの眠りを破り、私たちに自分の幻の神秘を〔suae uisionis arcana〕明らかにした。彼は言った。『私が牢獄から連れ出される

と、私の肉における兄弟である異教徒の人間〔homo gentilis〕がやって来た。彼は私たちの事柄に極めて好奇心をもち、愚弄するような調子で入念に調べ、刑罰としての暗闇と、牢獄での絶食の中で我々がどのような状態であるかを尋ねた。この者に対して私は、キリストの兵士たちは闇の中で最も明るい光をもち、断食においても満腹するほどの食物、すなわち神の言葉をもっている〔dei habere sermonem〕と返答した。……彼は言った。「私が知りたいのは、あなた方はみな、その命を軽視しているが、天の贈り物としての報償は、分け隔てなく、等しく与えられるのか、ということだ」。彼に私は答えた。「これほど大きな事柄に意見を述べることに、私はふさわしくない」。私は言った。「しばらくの間、両眼を天に向けて見上げなさい。あなたは、数え切れないほどの煌めく星々の一団を見るであろう。すべての星が等しく光の栄誉をもって光り輝いているであろうか。しかしそれでも、光はすべてにおいて一つなのである〔lumen omnibus unum est〕」。これに対し、彼はさらに好奇心をもって、質問すべきことを見出した。そして彼は言った。「それでは、何か区別があるとすれば、あなた方のうちの誰が、主の好意を獲得するに値するのか」。……私は言った。「より大きな困難を伴い、より多くの時間をかけて〔それに〕打ち勝った者たちが、より栄光に満ちて冠で飾られるのである。『豊かな者が天の王国に入るよりも、ラクダが針の穴を通して入る方がやさしい』〔マルコ 10：25、マタイ 19：24、ルカ 18：25〕〔と書かれている通りである〕」。……』。」（『マリアヌスとヤコブスの殉教』8,1-11）

夢の中でアエミリアヌスは、暗闇と絶食の中での生活はどのようなものかという異教徒の兄弟¹⁵の問いに対し、キリスト教徒が暗闇においても明るい光を持ち、また断食においても神の言葉という食物を持っていると答えている。また、天からの賜物が牢獄にいるキリスト教徒全員に平等に分け与えられるかという問いに対しては、天の星は様々な輝きがあるが、光そのものは一つであると答えている。そして、キリスト教徒たちそれぞれに区別があるとすれば、誰が最も神の好意を得るのかという問いに対しては、それは神のみが知っているとして、それに補足するかたちで、より多くの困難を経験したものがより多くの栄光に満ちた冠を与えられると説いている。ここでは、殉教者の報いに対して踏み込んだ議論が展開されており、問答形式の話の展開と、共観福音書の引用まで含めて、神学的

な見解の提示に主眼が置かれている印象を受ける。尚、アエミリアヌスが見た幻の議論は、話の接続部分から見ても、編集者が意図的に挿入したものとも考えられ、またマリアヌスやヤコブスとの関係もここでは述べられていない。

ここまで見てきた『マリアヌスとヤコブスの殉教』は、困難な状況下にあって迫害を耐え忍ぶ信徒を鼓舞することを目的として書かれていることが冒頭で述べられており（1,1-4）、編集者としての著者が「私」という一人称で語られている。実際に起きた出来事を基盤として書かれていることについては、いくつかの先行研究が指摘しているが¹⁶、ヤコブスの最初の幻の後で語られる、啓示としての夢と眠りに関する分析は殉教伝には珍しく、またアエミリアヌスが見た夢などは、著者が神学的議論を展開するための舞台装置のような役割を持っていることは指摘されうるであろう。

4. 『モンタヌスとルキウスの殉教』に見られる夢

上述の『マリアヌスとヤコブスの殉教』に近い時期かつ近い場所を舞台として、『モンタヌスとルキウスの殉教』が著されている。形式としては、牢獄からカルタゴの教会に宛てたものとされるこの殉教伝では、冒頭でモンタヌスを含む8名の殉教者たちが捕らえられたことが記されているが、実際にはそれ以外にも捕らえられていたキリスト教徒がおり、彼らのうちの幾人かが見た幻が書き留められている。夢と幻¹⁷の区別は、初期キリスト教思想全体において明瞭とは言い難いが、明確に眠りの中で示されたものとして、冒頭で示された8名に含まれるレヌスという人物が牢獄の中で見たものが次のように語られている。

（レヌス・幻）「それから、我々と共にいたレヌスが眠りに襲われ〔somno apprehenso〕、彼に示されたのは〔ostensum〕、〔牢獄にいた〕一人一人が連れ出され、それぞれが進み出ると、一人一人に明かりがその前に差し出されるというものであった。明かりがその者に先行することなく、進み出る者はいなかった。我々が明かりとともに進み出ると、彼は目を覚ました〔expergefactus est〕。彼が我々にそのことを語ったのち、我々は、「我々の足下の光」〔詩篇 119（LXX：118）：105〕すなわち神の言葉〔sermo scilicet dei〕であるキリストとともに歩んでいることを確信して、喜んだのである。」（5,1-2）

レヌスが見た夢は、これから牢獄の中にいる信徒の身に降りかかる出来事の予示と、その際にキリストが必ず彼らの足下を照らし、臨在することの確信と結び付いている。殉教伝では、この夢を見た翌朝、レヌスたちが尋問のために牢獄から一旦連れ出され、迫害を担う悪魔に打ち勝ったのち、牢獄へと引き返したことが語られている。尚、レヌスは聖職者として語られていないが、夢の内容が詩篇などの聖書の明確なモチーフと結び付けられているのはやや特徴的であると言える。

他方で、この殉教伝の冒頭で語られる8名に含まれるモンタヌスも、恐らく殉教の日が近づきつつある夜に、次のような夢を見ている。

(モンタヌス・幻)「……〔ある女性のことで、モンタヌスとユリアヌスが牢獄で言い争いをした〕同じ夜〔*eadem nocte*〕、モンタヌスに次のことが示された〔*ostensum*〕。彼は次のように言った。『私が見たのは〔*Visum*〕、我々の方に百人隊長たちがやって来るところであった。彼らが長い道を通して我々を先導すると、広大な野原に着いた。そこで我々が出会ったのは、キュプリアヌスとレウキウスであった。さらに、我々は光り輝く場所に着き、我々の衣服も光り輝き、また我々の肉体〔*caro*〕も、衣服の輝きよりもさらに光り輝き変化した。そのようにして、我々の肉体は透明となって、目の視覚が心の奥深くまで認められるほどであった。私は自分の胸の中の方を向いて、ある種の汚い染みを見出し、その幻の中で目を覚ました〔*experrectus sum in uisione*〕。すると、私の方にルキアヌスがやって来て、私は彼に幻のことを語り、「あの汚い染みが、私がすぐにユリアヌスと和解しなかったことを示しているのはご存知でしょう」と告げた』。そう告げると、私は目を覚ました〔*experrectus sum*〕。』(11,1-5)

この夢が示される直前に、モンタヌスとユリアヌスとの間で、ある女性信徒の交わりを巡って小さな諍いがあり、そのわだかまりのようなものが心の中の汚点として夢に現れたように描かれている。時間軸を表すものとして、ここでもカルタゴ司教キュプリアヌスが登場し、恐らく殉教者が引き上げられる広大な場所と、そこに導く百人隊長のような存在、および死後の肉体の様子が描かれている。尚、ここでも、殉教者は魂のみの存在として描

かれるのではなく、またその肉体は透明であるがゆえに、心の醜さのようなものが露呈してしまうとされている。この夢のあとには、殉教伝の編集者による、キリスト教徒のもつべき協調性などの重要性が説かれており、天上での報いに短く触れたのち、この殉教伝は締めくくられている¹⁸。

5. 『ポタミアイナとバシレイデスの殉教¹⁹』に見られる夢

ここまで、北アフリカのカルタゴを中心に、ラテン語で書かれ、時代的にも場所的にもある程度共通の思想的基盤を有する議論の中で、夢や幻が語られている箇所を分析した。他方で、Musurillo が校訂した『キリスト教殉教者の行伝』には、カイサリアのエウセビオスの著した『教会史』第6巻(6,5,1-7)で語られるポタミアイナとバシレイデスの殉教に関わる話が所収されている。ポタミアイナは4世紀には既に有名な殉教者とされていたようであるが、バラティオスの『ラウソスに宛てた修道士の歴史』ではマクシミアヌス帝(位 286-305)の時代の殉教者とされているものの(3,1²⁰)、エウセビオスの記述からはペルペトゥアと同じくセウエルス帝(位 193-211年)の時代の迫害を背景としているように見える²¹。群衆によって擲擧され、様々な侮辱を受けていたポタミアイナに最大限配慮をしつつ処刑場まで導いた兵士がバシレイデスである。尚、『教会史』の中でバシレイデスは、オリゲネスに感化された殉教者の一人として語られているが、彼とオリゲネスとの直接的な接点については全く触れられていない²²。

バシレイデスは、ポタミアイナが殉教してしばらくすると、他の兵士たちに対して自分がキリスト教徒であることを告白し、突然の回心の理由として次のような夢を見たことを語ったとされている。

(バシレイデス・幻)「……彼〔バシレイデス〕はこう言ったと語られている。

『ポタミアイナが、殉教の〔τοῦ μαρτυρίου〕三日後の夜に〔νύκτωρ〕現れ〔ἐπιστᾶσα〕、冠を自分〔バシレイデス〕の頭に囲むように置くと、「あなたの恵みについて主に嘆願し〔παρακεκλημέναι〕、その願いが叶えられました〔τετυχημέναι〕まもなくあなたは受け入れられるでしょう〔παραλήθесθαι〕」と述べた』。……」(『ポタミアイナとバシレイデスの殉教』6)

バシレイデスは、ポタマイナを処刑場に連れて行く際に、彼女から既にキリストの執り成しを約束されていたが、彼女は殉教の三日後に彼の夢の中で現れ、恐らくこれから殉教者として勝利することを意味する冠を彼にかぶせたとされている。この回心は、彼が牢獄に捕らえられたのち、聖職者たちによる聞き取りの中で語られたものであり（6,5,6）、これを聞いた彼らはバシレイデスに「しるし」（σφραγῖδος）、即ち洗礼を授けている。バシレイデスは、これを語った翌日に斬首されたが、アレクサンドリアでは他の多くの人々の眠りの中にポタマイナが現れ、キリスト教へと回心する契機をつくりだしたことをエウセビオスは述べている（6,5,7）。

この箇所では、短い記述ではあるものの、殉教者が地上の信仰者の執り成しをおこなうことが可能であるとする議論が確認され、ペルベトゥアの幻の議論と共通のものが見出される。他方で、夢を通じてキリスト教へと回心するという考え方は、オリゲネスの議論には明確に見られるものの²³、他の殉教伝では見られず、この殉教伝に特徴的なものとも考えられる。

6. 「まとめ」

ここまで、殉教伝に見られる夢の議論を分析してきた。殉教伝においては、悪魔が仕掛けた迫害に対し、殉教者がそれに対峙する中で、基本的には天においてどのような報いが与えられるかが示されることによって、彼らの信仰が強められていたことが確認された。このような状況の中で、殉教者が見た幻の内容は、編集者の改変の可能性は排除できないものの、ある程度共通するモチーフが語られていた。Dörnberg は、西方の三つの殉教伝に共通するモチーフとして、（1）殉教者の天への上昇、（2）天的な食物（水やチーズ、愛餐など）、（3）牧者や裁判者としての神やキリストの登場、（4）既に亡くなった者、特に殉教者の登場、の四点を指摘している²⁴。殉教伝を担う集団が地域的にも時代的にも特に近い点が推測されることから、ある程度これらに共通のモチーフが見出されるのは自然のこととも考えられる²⁵。

他方で、モチーフに関連する重要な論点として、夢の中では自明の事柄として語られる幾つかの教理的主題も確認できた。迫害を経て殉教した者たちは天に召し上げられている

ということ、またそこから、彼らもしくは彼女たちは地上の者たちの願いを引き受け、天において執り成しをおこなうことが出来るとされていたことが見出される。その執り成しは、サトゥルスが見た幻の中では、洗礼を受けたばかりの殉教者が地上の聖職者の上位にあって調停をおこなう姿として描かれており、地上の秩序を越えたものとして受け止められている。また、殉教者たちが見た夢は、それぞれ独自のものでありながらも、編集者によって普遍的に妥当する事柄として受け止められており、そこでは残虐なものも不快なものも、特に問題視されていなかったことが確認できる。それは、これらの夢が殉教者に対して「示された」ものであり、神的な啓示につながるものとして受け止められていることが背景にあると考えられる。殉教者が天に引き上げられるという教理的前提は、彼らが誤謬ないしは偽りの夢を語ることは無いという確信につながっており、そのような舞台装置の上で語られる事柄は、場合によっては聖書的な補強を加えながらも、ある種の普遍妥当性を獲得し、偽りの預言という誹りから免れることを可能としている。

既にエレミヤ書において、地上的世界には偽りの夢を語る預言者がおり、彼らに対する警戒が説かれている（23：25-）。しかし、「殉教者」の語る夢は、教理的な基盤に保持されつつ、このような懷疑から免れ、地上では見ることの出来ない筈の天の様子を伝える重要な役割を担ったと考えられる。

¹ 正確には、その夜にパウロにあらわされた「幻」（ὄρμα διὰ τῆς νυκτὸς τῷ Παύλῳ ὄφθη）。夢を直接的に指し示す単語は、新約文書全体を見渡しても基本的にはマタイ福音書にしか見られない（「夢で」（κατ' ὄναρ））。例外は、上記で指摘した使徒行伝中のヨエル書の引用箇所（「夢を」（ἐνυπνίους）もしくは（ἐνύπνια））と、夢想家（「夢を見る者ことによつて」（ἐνυπνιαζόμενοι））として批判的に取り上げられるユダの手紙の箇所（8）である。

² 『ストロマテイス』4,116,1 など。

³ 『ケルスス反駁』1,46 など。

⁴ 拙論（「テルトゥリアヌスにおける夢概念の分析 —『魂』の議論を中心として」『キリスト教学研究室紀要』10、2022 年、1-18 頁など）を参照。

⁵ Cf. Joyce E. Salisbury, *Perpetua's Passion: The Death and Memory of a Young Roman Woman*, Routledge: New York, 1997（ジョイス・E・ソールズベリ『ペルペトゥアの殉教 ローマ帝国に生きた若き女性の死とその記憶』後藤篤子監修、田畑賀世子訳、白水社、2018 年）；Peter Habermehl, *Perpetua und der Ägypter oder Bilder des Bösen im frühen Afrikanischen Christentum*, TU. 140, Walter de Gruyter: Berlin, 2004; Thomas J. Heffernan, *The Passion of Perpetua and Felicity*, Oxford University Press: New York, 2012.

⁶ この点において例外的なのは、Dörnberg の研究である（Burkhard Freiherr von Dörnberg, *Traum und Traumdeutung in der Alten Kirche: Die westliche Tradition bis Augustin*, AKThG. 23, Evangelische Verlagsanstalt: Leipzig, 2008）。ここでは、他の殉教伝との比較考察も行われており、本稿でもその議論を確認する。

⁷ テキストは SC 版（*Passion de Perpétue et de Félicité suivi des Actes*, Jacqueline Amat (ed.), SC. 417, Les Éditions du Cerf: Paris, 1996）を参照し、本研究で引用した

箇所については、以下、すべて私訳を試みた。尚、テキストの翻訳や校訂をおこなった Amat は、この SC 版以前に、夢に関する研究を刊行している (Jacqueline Amat, *Songes et visions: L'au-delà dans la littérature latine tardive*, CEAug. 3, Institut d'Études Augustiniennes: Paris, 1985)。以下、本研究における殉教伝については、H. Musurillo による英語対訳の校訂版 (Herbert Musurillo(ed.), *The Acts of the Christian Martyrs*, Oxford University Press: Oxford, 1972) と、土岐正策・土岐健治による邦訳 (『殉教者行伝』土岐正策・土岐健治訳、キリスト教教父著作集 22、教文館、1990 年) も参照した。

⁸ 第 2 の幻は、日をまたいで二つの幻から構成されており、これを別々に数えるとすれば、本殉教伝では五つの幻があると言える。

⁹ Kelly Bulkeley, *Dreaming in the World's Religions: A Comparative History*, New York University Press: New York, 2008, p.174.

¹⁰ テルトゥリアヌスもこの箇所を引用しているが、内容は大きく異なっている (『魂について』47,2)。

¹¹ 新預言運動との共通点以外にも、様々な要因からテルトゥリアヌスと編集者の同一視がこれまで行われてきたが、使用する言い回しなど幾つかの点で今日では殆ど同一視はされていない。編集者に関する論争史については SC 版を校訂した Amat を参照。Amat (1996), pp.67-70. また、編集者そのものについての考察は、Heffernan を参照。Heffernan (2012), pp.8-27.

¹² Musurillo (1972), pp.xxxiii-xxxiv. 尚、Dörnberg は、次節で見る『モンタヌスとルキウス』と共に、殉教伝に登場するキュプリアヌスからの影響についても主張する。

Dörnberg (2008), S.152.

¹³ テルトゥリアヌス『魂』43,5. Cf. 上掲拙論、5-8 頁。

¹⁴ ヌミディアの都市で、ヒッポの南西の内陸部に位置する。

¹⁵ Dörnberg は、この異教徒の兄弟に関する記述に、当時の殉教者とその非キリスト教徒の家族との問題が映し出されていると捉える。Dörnberg (2008), S.181.

¹⁶ 土岐 (1990)、327 頁。

¹⁷ 眠りや夜の出来事と結び付けられていない幻として、この殉教伝では司祭ウィクトルが見たものと、クワルティッロサという女性が見たものが報告されている。前者は、少年の姿をしたキリストが牢獄にやって来るという幻を (7,1-8)、後者は、既に殉教を遂げた自分の息子が牢獄にやって来るという幻 (8,1-7) を語っている。

¹⁸ 尚、この殉教伝には、十分に書き記されなかった内容として、無名の著者による付加された続きが存在している。付加箇所では、本文ではあまり語られなかった司祭フラウィアヌスに関わる出来事を中心に、牢獄に捕らえられた他の信徒たちの最後に関する様子が描かれている (12,1-)。ここでの無名の著者が、フラウィアヌスの見た夢の内容までも付加しているのは特徴的である (21,1-12)。

¹⁹ ここまでの殉教伝と同様 H.Musurillo の校訂版に加えて、カイサリアのエウセビオス『教会史』の SC 版 (Eusèbe de Césarée, *Histoire Ecclésiastique Livres V-VII*, Gustave Bardy(ed.), SC. 41, Les Éditions du Cerf: Paris, 1955,)、および秦剛平による邦訳 (エウセビオス『教会史 2』秦剛平訳、山本書店、1987 年) も参照した。

²⁰ κατὰ τὸν καιρὸν Μαξιμιανοῦ. Palladius, *Historia Lausiaca: Geschichten aus dem frühen Mönchtum*, Adelheid Hübner (hg.), FC. 67, Herder:Freiburg im Breisgau, 2016.

²¹ Musurillo (1972), p.xxvii.

²² 『教会史』6,4,1f. その他の殉教者として、例えばプルタルコスという人物が挙げられており、この人物が処刑される際に、最後までオリゲネスが傍にいたとエウセビオスは報告している。他の殉教者たちについても、オリゲネスの生徒であったことなどが語られているが、他方で、ポタミアイナやバシレイデスとオリゲネスとの関係についてはここでは語られていない。

²³ 『ケルソス反駁』1,46.

²⁴ Dörnberg (2008), S.212-214.

²⁵ これらの西方の殉教伝とは恐らく別の担い手が推察されるポタマイナとバシレイデスに関わる殉教伝では、殉教者が登場するものの、夢における天上のモチーフは殆ど見られない。

(つだ・けんじ 京都大学大学院文学研究科・教授)